

中国甘肅省石窟群におけるコミュニティ参加型遺産保護手法の確立 —シルクロード東端の地域アイデンティティを活かした遺産保護を目指して—

李 梅 (筑波大学 大学院人間総合科学研究科, mitsuimei@gmail.com)

Establishment of the community participatory type of heritage protection in the caves of Gansu Province in China: Aiming for the heritage protection with the regional identity of the Silk Road East End
Mei Li (Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba)

要約

甘肅省に位置する麦積山石窟は中国四大石窟の一つに数えられ、近年、研究機関や専門家による調査や学術的研究のほか、自然資源の開発も進んだ。観光ブームの到来に伴い、利益の扱いをめぐる行政と住民の間で思惑の相違が生じ、両者の関係が平行線のまま推移してきた。こうした現状を踏まえ、2013年11月～2015年10月にかけて中国甘肅省石窟群におけるコミュニティ参加型の遺産保護プログラム開発の取り組みを実施した。本プロジェクトでは、「行政と住民の間の信頼関係の構築」に重点をおき、「一緒にやる」が生む共通解を、合意プロセスの形成の指針とした。プロジェクトの中間及び最終段階で観光客を含めた大型イベントを開催し、地元住民に加えて、関係するすべてのステークホルダーに対してアイデンティティを活かした遺産保護の必要性を促した。

キーワード

コミュニティ, 住民参加, 文化遺産保護, 甘肅省, 麦積山石窟

1. はじめに

甘肅省は中国の西北に位置し、国内では一人あたりの年間収入が下位3地域に位置する貧困地域である。近年、政府主導の「西部大開発」政策（中国の内陸西部地区を経済成長軌道に乗せるための政策。2000年3月、全国人民代表大会で決議された。）や新たに提起された巨大な経済圏を構築する「一帯一路」（「シルクロード経済ベルト」及び「21世紀海上シルクロード」を示す。2014年習近平国家主席が提唱した経済圏構想。）といった経済圏構想によって地域開発が少しずつ進められている。

また、この地域はかつてのシルクロードの沿線にあり、仏教や関連寺院などで栄えてきたため、数多くの仏教遺跡が残され、中でも石窟は中国有数の密集地域である。地域開発の柱の一つである観光開発において、自然資源と文化遺産の活用は極めて重要な役割を果たすが、整備の遅れや発信力の不足により、十分に活用されていない。

他方、当該地域の石窟については、西北部の敦煌石窟群を除き、文化遺産の修復理念に基づく保存・保護はまだ不十分であり、劣化が進行している。国際的な文化遺産保護においてはオーセンティシティ（真正性）を重視した修復が不可欠である。今日、美術史的観点から保存修復のあり方も含めた研究が必要とされている。また、近年の国際社会は、遺産保護におけるコミュニティ参加の重要性を重視し、世界遺産条約に代表されるユネスコの施策においても地域社会の向上に資する遺産保護の実践が求められている（西林, 2013）。

こうした現状を踏まえ、中国におけるコミュニティ

参加型の保存修復手法の立案を目指し、2013年11月～2015年10月にかけて中国甘肅省石窟群におけるコミュニティ参加型の遺産保護プログラム開発の取り組みを実施した。

本プロジェクトでは、地元の研究所、小学校等に関係する多様なステークホルダーと連携し、遺産保護及び地域社会の向上を目指したプログラムを段階的に実施した。本稿は、プロジェクトを通じて得られた知見に基づき、遺産保護におけるコミュニティ参加の意義及び課題などについて実践的な観点から報告するものである。

2. 調査対象地域の概要

本稿では、甘肅省東南地区に点在する数多くの石窟のなかで、天水麦積山石窟（以下、麦積山石窟とする。図1）及びその周辺を研究対象とする。当該地区には、遺産区域内の住民約310人（花, 2011, 75）を含む約2,000人の住民が居住している。

麦積山石窟は、中国が1949年に建国されるまで、麓



図1：麦積山とその周辺
注：魏文斌撮影。

にある「瑞応寺」に居住する僧侶が自主的に管理を行っていたもので、天水が解放された際、石窟の管理は政府に移管され、以後、政府によって管理されてきた（張，2002，9）。1940～50年代にかけて地元の学者である馮国瑞氏をはじめ多くの学者や研究者が調査・記録を行い、1956年秋、日本の写真家名取洋之助氏が山の全貌と洞窟の内部を写真に収め、『麦積山石窟』（名取，1957）を出版したことによって、麦積山石窟は国際的に認知されるようになった。

近年、自然資源、文化資源の開発が進み、観光ブームの到来と相まって麦積山石窟は観光地に成長した。政府が遺跡を文化財に指定し、文化財周辺を含めたエリア全体を保護範囲とする「退耕還林」（耕作をやめ森林に戻す政策）が1990年代から進められた。環境に配慮した施策が行われ、土地を国有地にする一方で、住民に対しては都市戸籍を与え、財政補助などが実施された（花，2011，67）。

しかし、観光事業に加わる住民の数の増加及び観光業の成長が急速に発達するにつれ、観光客の対応をめぐる行政と住民の間で思惑の相違が生じ、双方の考えに溝が深まっていった。例えば、用地が徴収され助成に不満を抱えた住民が石窟まで結ぶアスファルト道路を掘り起こしてしまう事件が発生したことを現地職員からヒアリングした。

1953年に麦積山石窟の管理機関である「天水麦積山文物保管所」が創設され、1986年に「麦積山石窟芸術研究所」と改められた。行政が保存修復・観光案内など業務全般を扱い、人材や設備などを投入して管理・運営を行っている。とりわけ1984年に山体の強化工事が完了し、一般公開を始めて以降、平均で年間延べ20万人の観光客数を維持している（張，2002，232）。観光業務において、観光客に対する案内説明は研究所の正規案内係に任せられている。一方、住民の中にも観光案内を生業とする者がいる。ただし、住民による案内は石窟の入場口の階段までしか行くことが許されておらず、たとえ一般参観券を購入しても石窟に入ることが許可されない。こうしたなかで、行政と住民は長い間、協議や討論どころか会話すら交わしたことがなかったようである。研究所に雇われた経験のある一部の住民を除き、一度も石窟に入ったことのない住民が少なくない。住民は不十分で限られた知識のみで観光案内業に従事している。窟内に上がることができず存分に業務を遂行できない不満、そして行政に自らの業務・業績を認めてほしいという願望が住民側にあった。

麦積山石窟は近年、経済力の向上による観光ブーム、とりわけ2014年6月に世界遺産に登録された相乗効果により、ピーク時には一日の観光客が2万人に迫っている。日々変化する文化遺産の状況に行政のみでは対応しきれないなかで、住民との連携が重要な課題として取り上げなければならない局面を迎えている。

なお、住民を含めた地域の関係者がアイデンティティーを持っていないわけではない。とりわけ住民側の言動か

ら溢れ出る地元に対する愛情に深いものがあつた。行政や地域住民など、観光や文化遺産に携わる関係者それぞれが地域そのもの、あるいは地域資源を愛しており、自らのアイデンティティーとしている。しかし、遺産の保存体制の確立や観光資源化によって、そのアイデンティティーが、文化遺産の保全や地域形成に対して効果的に機能しなくなっていることが現状の課題として捉えられる。本プロジェクトでは、地域資源の価値、保全のあり方をステークホルダーが共有し、地域住民のアイデンティティーを活かした遺産保護の展開を目指した。

3. 取り組みの展開と成果

行政と住民の両者は交流がなく平行した関係が続いている状況を踏まえ、麦積山石窟の保護マネジメントに向けた両者の合意形成が重要な課題として捉えられた。そこで、表（②、④、⑤、⑥、⑦、⑧、⑩）のような取り組みを実施した（表1参照：2年間にわたり行った主な活動・イベント）。

3.1 合意のプロセス

信頼関係を構築する第一歩として、行政側と地元住民をつなげることが重要である。「退耕還林」政策によって、地元住民はすでに農業から離れており、文化遺産に頼って観光業に専念する者が多く、小売業、観光撮影、民宿経営などが主たる生業である。この中から、日頃活発に活動していて地元の人たちの尊敬を集めている観光業に従事する人々を中心に「住民チーム」を作った。同時に、行政の許可と支援を得て研究所職員の中からプロジェクトを理解し賛同する者を中心に「職員チーム」を作った。両チームを活動の中心的メンバーとして、連絡、意思疎通、意思伝達を図ると同時に、責任の所在を明確にした。

また、文化遺産と直接に関わりをもつ住民のほか、地元小学校の生徒も住民の範囲とした。若者が出稼ぎのために都会へ出ていき、老人・子どもが中心の農村部で、小学校の生徒たちがふるさとへの愛着を育み、文化遺産への理解を深めるためである。「我心目中的麦積山」（「私の麦積山」というテーマで、小学校で企画・実施した絵画イベントでは、子どものみならず校長や教員も積極的に参加し、それぞれの麦積山への思いを絵に描き、言葉にして発表した（図2）。学校側がさらに「私の麦積山」をテーマに絵の展示を行いイベントの継続を図り、子どもたちの学習意欲と関心を引き起こした。続けて、筆者が学校側に麦積山の古写真が載っている図版（名取，1957）と世界遺産カルタを贈呈し、よりよい学習循環が形成されるよう学校側と連携した。一方、研究所からは職員が学校へ出向いて、歴史や保存など各自の専門と結びつけて文化財に関する授業を行った。学校、行政の積極的な関与が地元の連携を強めたほか、学校がもたらした活気と融和は行政と住民の関係を和らげる効果も得られた。

行政、住民、小学校の三者の相互連携関係の形成が住民の文化遺産保存・保護への参加のベースとなり、互い

表1: 2年間にわたり行った主な活動・イベント

| 時期 | 会場 | 取り組み | 参加人数 (人) | 取り組みの成果 | |
|----|---------|--------------------|--|------------------|---|
| ① | 2013.10 | 研究所所長室 | 所長にプロジェクトの主旨を説明し理解と支持を得る。 職員に事前に説明協議し、理解と支持を得る。 | 研究所 3 | 行政主導のもとでその許可と支持を得ることが重要。 |
| | | 研究所会議室 | 意見交換会を開き、プロジェクトの主旨説明。 | 住民 20 研究所 2 | |
| ② | 2014.4 | 研究所会議室 | 住民との意見交換会。 住民チーム 30 (中心メンバー 5)、職員チーム 4 (+アドバイザー 5) | 住民 5 研究所 2 | 住民と行政の両方に作業チームを作り、意思伝達をスムーズにし作業の効率をあげ責任の所在を明確にする。 |
| | | 小学校 | 「私の麦積山」をテーマとしてワークショップ開催。 | 研究所 2 小学校 60 | |
| ③ | 2014.5 | 小学校 | 学校が主催の「私の麦積山」の展示会。 職員チームと秋期ワークショップを協議・計画。 | 小学校 70 | 比較的関係作りが容易な行政対学校のパイプが形成。 |
| ④ | 2014.6 | 小学校 | 職員が「昔の麦積山」のテーマで講座。 職員チームとプロジェクトロゴをデザイン。 | 研究所 2 小学校 70 | 行政対住民の関係作りの一助として身近な小物を作製。 |
| ⑤ | 2014.7 | 研究所 学校 麦積山周辺 | 職員チームと「我愛麦積、不留垃圾」(麦積を愛しゴミを残さず)を印字した手提げ袋 300 枚を発注、配布し住民と交流し広い範囲の宣伝を展開。 | 住民 100 研究所 10 | 一緒にやることによる共感、一体感を呼び起す。 職員と意見交換し問題点を整理し次のイベントを計画。 |
| | | 食堂 | 住民チームと意見交換会。 | 住民 5 | |
| ⑥ | 2014.11 | ホテル部屋 | 住民と勉強会開催、時代ごとの窟と共に学習。 | 住民 20 筆者 | 行政と対等に対話するため知識を身につける必要がある。 |
| | | 小学校 研究所 | 校長、職員チームとそれぞれ次の年間活動について意見交換。 | 小学校 1 研究所 2 | |
| ⑦ | 2015.4 | 石窟 | 研究所と協議し許可取得。住民代表が研究所の案内により一回目の窟見学。 | 住民 6 研究所 2 | 時間をかけ地道な相互関係作りがもたらしたのは行政が住民の遺産保護参加の重要性に気づき、行政の意識変化につながった。 |
| | | 小学校 | 「郷土を記録しよう」のテーマでワークショップ開催。 | 研究所 2 小学校 60 | |
| | | 研究所食堂 | 研究所が「世界遺産」をテーマにした公開講座を開催。 | 住民 35 研究所 5 | |
| | | 研究所食堂 | 研究所と住民チームが初協議、交流。 | 住民 10 研究所 1 | |
| ⑧ | 2015.6 | 研究所 | 住民代表が研究所を訪ね意見交換。 | 住民 3 研究所 2 | 住民が行政に対する信頼が高まり、行政が積極的に住民の活動を取り入れる動きが現れた。 |
| | | 小学校 | 職員が遺産保護について講義。 職員による学校での「地元学者——馮国瑞」の授業を計画。 学校でのワークショップは研究所が主催する宣伝イベントの一環に。 | 研究所 2 小学校 30 | |
| ⑨ | 2015.8 | 観光案内所 | 住民チームと 10 月のイベントについて協議、意見交換。 | 住民 5 | 「一緒にできる」を行うことで一体感がより強まった。 |
| | | 研究所 | 校長、職員チームとそれぞれ 10 月のイベントについて報告、意見交換。 職員チームとロゴ、横幕について相談。 | 研究所 5 | |
| ⑩ | 2015.10 | 研究所 学校 麦積山周辺 | 「为了下一個 1600 年」 (「手をつなごう in 麦積山——次の 1600 年のために」) 研究所、住民、学校三位一体のイベント開催。 手提げバッグ 1200・水筒 200・葉書 300 を配布し広く宣伝展開。 | 観光客を含めた広範囲 | 横幕を 3 か所一斉に掲げる。 共同作業を行うことで同じ「解」を見出す。 |
| | | 石窟 | 研究所の案内により住民が二回目の窟見学。 | 住民 7 研究所 3 | |
| | | 研究所会議室 | 研究所が公開講座、住民・研究所の交流協議会開催。 | 住民 30 研究所 4 | |



図2：小学校でのワークショップ

注：筆者撮影。

に関わることで相手への理解を深めることにつながった。また、一連の取り組みを通じて、よりよい信頼関係を築き、協働して文化財を守っていくことの重要性を確認できた。

3.2 「一緒にやる」が生む共通解（桑子, 2013）

住民からは、文化遺産保護の参加におけるプロセスでは誇りの高まり、自信の増加、意識変化など見られた。

ワークショップ、意見交換会、講義を積み重ねているうちに、自分も遺産保護の一人である誇りをもつようになり、それまで自覚があいまいだった状態から、文化遺産への愛着が一層湧くようになった。行政の許可のもと、住民が一度も足を踏み入れたことのなかった窟内に入り、実際に文化遺産を見学して学習した。こういった学びを初めて体験することによって、それまでの不正確な知識の見直しが必要だと住民が自覚するようになった。筆者が贈呈した『麦積山石窟』を用いて麦積山の歴史について勉強し、時代ごとの窟のすがたや案内するうえで注目すべき窟の特徴など、全体での学習時には多くの質問が出された。窟見学の間、初めて目にする造像や壁画を食い入るように観察していた。正確な知識や情報を身につけることで住民が自信をもつようになった。文化遺産保護を実現するには住民が遺産について学び、行政との距離を縮め、対等的に議論を交わすにも、知識のレベルアップが必要である。この自信はさらに行動を呼び起し、ほかの石窟についても見学・学習しようとする動きへとつながり、2015年秋、麦積山石窟と同様に、世界文化遺産に登録されている龍門石窟を見学する団体ツアーが実施された。

当初、住民は利益獲得が遮られたことに対して不満をもっていたが、意見交換会を経て自分たちの立場や状況を述べることを通じて、自ら姿勢を和らげ行政に近づく行動をとるようになった。その変化は、同じテーブルを囲んで、行政リーダーと話を交わした講座及び意見交換会の後、表れはじめた。長年、研究所に向くことがなかった住民チーム代表がコンタクトを取るために研究所を訪れた。

観光業を通じて経済的な利益をメインに求めてきた住民は、上記を踏まえて文化遺産の保護に関与する意識が

強くなり、行政と共通なテーマを共にする自覚が生まれた。住民チームを編成する観光案内のメンバーは最もはやく行動に移り、解説内容の統一を図るにとどまらず、ユニフォームも統一して責任に対する認識がより明確になった。

そして、度重なる交流の場を通じて、行政側は住民を受け入れるような変化が徐々に現れた。筆者が行った講義に加えて、行政に講座を開くよう働きかけ、行政が主導する講義を行われるようになった。世界遺産をテーマとした公開講座を住民向けに開かれ、研究所の観光案内が専門であるリーダーの一人が講師を務めた（図3）。これは行政が住民と直接に対面した交流であった。参加した住民は説明会の時より多く、会場となった研究所の食堂が満杯になり、知識へ、そして行政との交流への渴望が参加者のまなざしから溢れた。



図3：公開講座

注：筆者撮影。

本プロジェクトは職員チームと住民チームと長い時間をかけて、「麦積手拉手——為了下一個1600年」（「手をつなごう in 麦積山——次の1600年のために」）と題する大型イベントを企画し、2015年10月に実施した。これは行政、住民、学校の三位一体のイベントという位置づけで準備・開催したものである。「麦積手拉手——為了下一個1600年」と印字された長さ十数メートルの横幕を3枚、麦積山石窟の入口近く、住民観光案内所、小学校の3か所で同時に掲揚された。イベントのメインプログラムとして、研究所のリーダー2人を講師として迎え、公開講座を研究所の会議室で開催した。美術史及び修復保存に関する講義を30人ほどの住民が傾聴した後、設けられた質疑応答の時間を大幅に超過し熱い議論が交わされた。

2年間のプロジェクトのみでは、利益の衝突に伴う長年のわだかまりが完全に解消するに至らず、まだ時間を要するが、意見交換の場が増えるにつれ、行政側には、自ら協議の場を提供したり、入山許可を出したりして、それまでの姿勢と異なる動きが見られるようになった。窟見学を許可したことは、行政における大きな変化である。

また、本プロジェクトが進めた小学校での講義、ワークショップを、行政は、2015年6月に世界遺産登録1周年の記念を行った際、宣伝イベントの一環として織り込み、ネットワークを通じて広く発信した。

住民の遺産保護参加は、通常、中国では行政主導のもとで行われる。行政主導という点はポジティブにとらえる必要があり、これを前提として、住民の生活を大切に、住民の意志が反映されるように住民が文化遺産と関与していくことがポイントである（高倉, 2011, 10）。したがって、本プロジェクトは、住民がどのようにして行政と軌道を一致できるかに力点をおいた。住民の立場からみて、行政に長年活動を認めてもらえなかったことが自信をもてなかった一因であった。このため、同じ「解」を求め、ワークショップ、意見交換会、公開講座、宣伝イベントなどさまざまな方法を重ねた。双方が同じテーブルに座るまで長い道のりであったが、住民参加の重要性に行政が気づき受け入れる動きを見せ始めた。今後も引き続き、行政は住民向けの公開講座を継続していく。そのうえで、行政は今後文化遺産保護に住民の関与の仕方について、観光案内に従事する住民の編成を第一歩に具体的な議論を始める見通しである。

4. 取り組みを踏まえた課題

取り組みを通じてさまざまな成果を得ることができたが、同時にいくつかの課題も残っている。本章では、その課題について整理を行い、本稿の結論へとつなげていきたい。

第一に、学術知識の普及のもと、地元職人の育成、そして文化遺産の修復に地元職人が参与することを目指していたが、現時点ではまだ現実的ではなく長い時間をかける必要がある。住民は文化遺産について基本知識さえ乏しいレベルにあった。知識の欠乏が遺産保護に関わることを難しくする一因であるため、基礎知識を蓄積していかなければならない。筆者が勉強会を開催し、窟の開鑿時代に照準して基本知識から学習を共にしたが、遺産を修復する段階に至るまでは持続的な学習が必要である。

第二に、住民参加型の保存修復のためのコミュニティの形成については、これは今回のメイン項目であり、まず住民の一部を団結することから始めて全体のコミュニティの形成を目指した。ワークショップや勉強会、イベントを通じて団結力と求心力を高め文化遺産の保存保護に参与する意識の芽生えをフォローした。これによって、観光案内や写真撮影、小売の一部など遺産保護の参加に高い関心と意識をもつ住民はコミュニティの核心を形成した。コミュニティの規模の拡大には長い時間を要し、さらなる働きかけが必要である。

最後に、甘粛省の東部にさらに一か所のモデルケースを作る予定であった。甘粛省南部、東部の主な石窟寺院を調査した結果、周辺に住民がいないケースを除き行政による管理が先行して住民と離れている実態が分かった。信頼関係作りには長い時間、労力及び人脈が必要であり、短期間での実現が困難と判断して、条件が比較的そろっている麦積山石窟に集中した。

当初の計画では、美術史や世界遺産などの基礎知識に関する冊子を作成し配布する予定であったが、現地の職員と協議した結果、それまで配布された紙媒体のテキス

トの多くは読まれずいたるところに捨てられた状況を踏まえ、実用的な物品作製に計画変更をした。プロジェクトのための、麦積山の輪郭をかたどったデザインのロゴを考案し、物品作製の際に活用した。小売業や観光案内業が活躍する現状に合わせて、普段役に立つ手提げバッグ、水飲みコップ、はがきを作り配布した。住民と行政が同じものを持つことによって、「一緒にやる」の一環として効果が図られた。配られた時点、小売業の人々が線香など早速商品を入れて使用し始めた。また、一般の観光客には手提げバッグのほか、ロゴ入りのハガキを配布し、入山口付近にある郵便局を利用し親戚や知人に郵送してもらうように設定し、宣伝範囲の拡大をねらった。

そのほか、格差や教育、観光客の共感など新たに気づいた問題もいくつかあった。

住民間の格差の是正がより多くの住民の共感を得るための鍵である。例えば、同じ住民といっても、道路に面して居住を構える家は民宿の経営が可能である一方、そういう地の利を持っておらず直接文化遺産から利益を享受できない者もいる。両者の間には利益獲得をめぐる経済的な差が広がり怨念さえ生じており、愛着や意識などにおいて差が生まれている。特に政府の政策によって土地を失い不利な条件に置かれた住民に対して、住民全体の一体感を保つため政策面における対策が必要と考えられる。例としては、果物やナッツなど地元特産品を生かして付加価値を高めた商品（ジャム、菓子など）の開発、販売を手掛けるなど、遺産ロゴマークを活用した経済活動が必要である。

経済的効果、利益の確保は格差を改めることができる一つの手段である。利益の差がなくなっただけではじめて意識の差が埋まると考える。

格差のほか、教育問題も大きな課題である。麦積山が位置する山間では、男尊女卑の観念がまだまだ残っており、女の子が進学する必要はないと考える保護者が少なく、小学校または中学校の卒業後、学校をやめて家業を手伝うようになる女の子が数多くいる。観光業に頼りながらも認定屋台を持たない女の子は、自由販売業になるケースが目立つ。手に持つ商品が質の低い土産物であり、標準語も話せない者は観光客とのやりとりで困る場面もしばしば見られる。販売業として認められていないのは一つの問題点であるが、根底には教育、貧困の諸問題があり、とりわけ教育の大切さを痛感させられた。これも長期的なプランが必要で今後取り組む重要な課題である。

文化遺産は名を馳せるにつれ、観光客の殺到が避けられない。一時滞在する観光客が自身の楽しみを優先し、マナーを無視するケースが目立つ。麦積山石窟の場合、世界遺産に登録されるため、関係者が多大な労力と時間をかけた。にもかかわらず、登録を果たした後、息がつく余裕もなくそれまでよりも厳しい破壊行為と直面している。観光客が消費者であるという漫然とした意識で訪れており、ゴミを捨てたり禁止事項を守らなかつたりするなど、問題が山積みである。そこで、遺産に対して自分も保護者の一員であるという自覚を観光客に芽生えさ

せるには、ワークショップの開催など創意工夫による啓発を広い範囲で行って、文化遺産を守る者——すべての者が「住民」という意識が持たれるように、観光客へ丁寧かつ持続的な説明が必要である。

5. おわりに

経済が発展している今日の中国では、辺鄙な農村部から都市部へ出稼ぎに行く傾向が強い。若者が多く出て行ったなかでも地元を離れることをせず、限られた観光資源を利用しながら、観光業務に従事している住民がいる。観光客が殺到する祝祭日には、研究所の対応の軽減につながると考え、迂回路から観光客を案内するようにしている。住民チームのリーダーが「行政側の要請があれば、我々はいつでも応える用意がある」と言った。この発言は、麦積山での彼らの役割を意識したものであろう。

また、麦積山周辺は夕方暗くなるにつれ、職員が退勤し町に戻り、住民も下山していく。自動車に乗り合ったり、三輪車に誘い合ったりして声を掛け合う光景が随所見られる。だれ一人も取り残さないようにするこの気兼ねないことは行政や住民の範疇を超え、助け合う自然な行動となっている。筆者も度なりお世話になり、多くの地元住民に助けられた。

山間にある麦積山は長い間、住民の連携がこのように、自発的な無形なつながりによって結ばれ、アイデンティティーの源となっている。

今回のプロジェクトの推進は長年かけて築いた職員や行政との信頼関係がなくては遂行できなかった。と同時に、住民との確かな信頼関係によって実現したものである。プロジェクトの前半は住民チームと何度も会い、その声に耳を傾け事情を把握して理解することに時間をかけた。販売業の住民と一緒に屋台に立ち販売を手伝い、個人個人との関係を重要視して、実際の状況を観察し住民と共に活動した。立場を理解すること、行動を共にすること、行政との間の調整を担うなどを通じて真の信頼関係が生まれた。

この信頼関係を生かし、第三者の立場を発揮して行政と住民との間に橋を架けることに至った。行政・住民の双方の良好な関係作りのため長いレールを敷き、長いスパンの発展を目指した。

ユネスコ元事務局長の松浦氏は「一般公衆の理解と支持なくして、また、世界遺産の真の守り手である地域社会による配慮や日常的な世話なくして、どんな基金でも専門家集団も遺産を十分に保護することはありえないだろう」と述べている（長谷川，2009，10）。住民がいかに遺産保護に参加できるか、これは今回のプロジェクトを貫く問題である。住民参加型の実現はやはり行政の理解と支持が不可欠であって、そのため引き続き信頼関係を保ちながら働きかけていく必要があると考えている。

謝辞

本稿はトヨタ財団 2013 年度個人助成を受けて行った研究調査の成果で、2015 年トヨタ財団に提出した報告書を

大幅に加筆・修正したものです。

2 年間、多くの方に支え協力していただきました。何よりも採用して下さったトヨタ財団に貴重な機会をいただき心より感謝申し上げます。

引用文献

- 花平寧 (2011). 麦積山石窟環境與保護調査報告書. 文物出版社.
- 桑子敏雄 (2013). ドボク再発見. 日経コンストラクション トップ. <http://kenplatz.nikkeibp.co.jp/article/const/column/20130812/628049/>.
- 高倉健一 (2011). 世界遺産保護における住民による主体的活動の重要性について. 年報非文字資料研究. 神奈川大学日本常民文化研究所非文字資料研究センター.
- 張錦秀 (2002). 麦積山石窟誌. 麦積山石窟誌編纂委員会.
- 西林万寿夫 (2013). 成果文書「京都ビジョン」の発表. 世界遺産条約採択 40 周年記念最終会合報告書 (日本語版). www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/culture/kyoryoku/unesco/isan/world/.../report_40th.pdf.
- 名取洋之助 (1957). 麦積山石窟.
- 長谷川俊介 (2009). 世界遺産と地域住民. レファレンス, 10 月号.

Abstract

Gansu province is a poverty area located in the northwest of China. It was once on the wayside of the Silk Road and has left many Buddhist ruins. Maijishan Cave is the object of this project that is one of the four major caves in China. In recent years, research institutions and experts promoted studies and academic researches as well as developing nature resources. For a long time, differences of speculation between the government and the local citizens concerning the handling of profits have remained in parallel lines. The focus of this project was “building a relationship of trust between the government and the citizens.” “Doing together” was quite important for this project. At the middle and final stages of the project, local citizens and tourists developed their identity gradually as the stakeholders.

(受稿：2016 年 6 月 16 日 受理：2016 年 11 月 19 日)